

伝統行事を通じた地域コミュニティの形成

—— 諏訪御柱祭の一事例 ——

小西 恵美*

既存のコミュニティをいかに維持し、発展させるかは大きな課題である。現代社会では、地域コミュニティにおける住民同士のつながりの希薄性がしばしば問題となる。地域行政ではコミュニティの安定のために住民間の新たなつながりを求め、社会関係資本の創造と関連させて議論されることも多い。確かに人口移動の大きい都市部や新興住宅地のように、住民間での自律的な信頼関係を築きにくい場所では、行政が主導して社会関係資本を構築するのは有効な手段なのかもしれない。しかし、昔ながらの隣人関係がまだ残り続ける場所では、長い間に蓄積された慣習や伝統を守り続ける中で、コミュニティを維持し発展させることが可能であるように思われる。

そうした一事例として本稿でとりあげるのは諏訪地方である。諏訪地方には古くから地元の住民の信仰を一手に集めてきた諏訪大社があるが、その祭事である御柱祭は千年以上もの伝統がある。7年に一度しか開催されない御柱祭は、その頻度から考えると、非日常的な特別な行事であるように思われる。しかし諏訪に居住する氏子の奉仕活動によって支えられてきた御柱祭は、実は、普段の生活の延長にあり、生活共同体としての地域コミュニティの形成に大きな役割を果たしてきた。本稿では、長い間諏訪の住民たちをつなぐ役割を果たしてきた御柱祭に目を向け、それがコミュニティの維持にどうかかわってきたのか、そして社会の変化にどう対応してきたのかを、聞き取り調査をもとに論じることとする。

諏訪大社は異なる起源をもつ上社と下社に分かれており、御柱祭もまったく別の日に、それぞれ独自のやり方で行われる。したがって本稿では上社領域を対象とし、次の2点に焦点をしばって検討していきたい。まず、御柱祭を通してできるネットワークが普段の生活の延長にあることを示した上で、長い間その伝統を継承してきた御柱祭が既存の地域コミュニティを維持する上で果たしている役割を明らかにする。次に、御柱祭が諏訪地方における近年の社会的・経済的变化に対応しているのか、もしそうであ

* 専修大学社会関係資本研究センター研究員・経済学部教授

るなら、それが地域コミュニティ内の関係性の形成にどう影響を与えているかを考えることにする。

1. 御柱祭の概観

7年に一度、寅と申の年に開催される御柱祭は、正式名称を式年造営御柱大祭といい、起源は千年以上前にさかのぼる804年だという見方が通説である。征夷大將軍の坂上田村麻呂は桓武天皇の命を受け東北征伐に行く際、軍神としての諏訪大明神の守護を祈念した。そして無事大任を果たした際、諏訪大社の式年造営にあたるよう桓武天皇が神恩奉謝の勅命を出したのが、今にいたる御柱祭のはじまりと解釈される。しかし、諏訪大明神は五穀豊穰、狩猟・農耕の神としての古くからの信仰もあったし、規模は小さいながらも寅と申の年にはそれ以前から造営があったことも記録されており、起源を特定するのは難しい。現在の御柱祭は社殿を囲む4本の柱を建て替える祭事であるが、江戸時代以前には信濃之国をあげての一大行事であり、社殿や鳥居、玉垣まですべて新しくされたこともあった。諏訪藩支配の下で規模が縮小されたのは江戸時代のことで、その時、現在の諏訪地方3市1郡に住む人々の奉仕と決められた。その形は第二次大戦後も、諏訪に居住する諏訪大社の氏子によって維持されてきた。

御柱祭大祭とは、4月と5月に催される山出しと里曳き、建御柱を総称した呼び名である。しかし、上社の場合、準備は御柱祭開催年の2年前に御小屋山での御柱の見立てから始まる。開催年の2月には諏訪大社で抽籤会が行われそれぞれの柱の担当地区が決定し、翌月には御柱用材の伐採が行われる。そして4月上旬に3日間にわたり、御小屋山のふもとの「綱置場」から町まで曳いておろす山出しがはじまる。その過程では、両側に民家が立ち並ぶ非常に狭く曲がった通り(穴山大曲)をうまくコントロールしながら通り抜けたり、急な坂をすべり落とす「木落とし」、雪どけのつめたい川を柱とともに曳き子が泳いで渡る「川越し」といったいくつもの見せ場がある。5月上旬には、さらに3日間にわたる里曳きが始まる。山出し終了後、柱を一時的に置いておいた「御柱屋敷」から前宮本殿と本宮境内を目指して曳行し、建御柱を行う。下社でもほぼ同様の過程があるが、前述のように日程もやり方も上社とは大きく異なる。最も大きな違いは、曳行中の柱の形であろう。上社は柱の前後にめどでこ(以後、「めど」と表記)とよばれる角をつけ、その上に人が鈴なりになりながら、めどを左右に揺ら

資料1 めどでこ



して曳行するが(資料1)、一方の下社の柱にはめどはなく、柱そのものを曳く。

御柱大祭は里曳きで幕を下ろすが、その後は各地域・地区のお宮で小宮祭と呼ばれる柱の建替え行事がはじまる。大祭と同様に、各地域・地区は御柱を切り出し、曳行し、建てるのである。諏訪地方には鎮守様や氏神様を祭っている大小様々な神社が存在するが、こうした小宮の氏子たちが区(部落)や氏(郷)の単位で小宮祭を行うのである。小宮祭の日程の決定は各小宮に任せられているため、早いところでは6月、遅いと年の終わり頃に催行されることもある。こうして準備期間から小宮祭が終わるまで、御柱年の諏訪地方は祭り一色になるのだ。

2. 御柱祭を通じた伝統的コミュニティの維持

周囲をいくつもの峠という自然の要塞で囲まれている諏訪地方は、地理的にも隣接地域とは切り離されている。独特の「諏訪文化」をもつといわれ、「諏訪人」としての意識の強さも指摘される。今回、ヒアリング調査に答えてくれた方々の口からも、諏訪を意識する言葉はしばしば聞かれるが、こうした諏訪文化の一つは諏訪大社信仰であろう。御柱祭は諏訪人にとって最も重要な場の一つであり、コミュニティの維持にも一役かっている。本節では御柱祭の参加の単位を明らかにし、どのように生活共同体たるコミュニティが維持されているのかを見ることにする。

御柱祭ネットワークと参加単位

冒頭では諏訪のまとまりを強調したが、しかしながら、総面積715km²もの広範囲に及ぶ諏訪地方は、その中で、地域性や自律性の強いいくつもの地域に分かれる。今回の調査対象である上社の領域だけでも、茅野市全域と諏訪市の一部、諏訪郡富士見町と原村を含み、これらが一枚岩であるとは決していえない。そもそも茅野市は、1955年以前、ちの町(以前の永明村)、宮川村、金沢村、玉川村、豊平村、泉野村、北山村、湖東村、米沢村という9つの独立した町村であった。諏訪市は、上諏訪町が中心となって豊田村、四賀村がまず合併し、その後湖南村と中洲村も合併してできた市である。諏訪市の大半は、元は下社の領域であったが、氏子人口の均等配分の観点から四賀と豊田は上社の領域に移行され、その結果、湖南、中洲、四賀、豊田といった上諏訪以外の諏訪市は上社の領域になった。また、富士見町は富士見、落合、境、本郷の4村が合併したものである。これらに原村を加えた18の町村が昔からの地域区分であり、生活単位であった。そして、本稿で扱う御柱祭に参加するための伝統的な単位でもあったのだ。御柱祭では8本の御柱を準備するため(本宮の一之御柱～四之御柱、前宮の一之御柱から四之御柱：以後、本一～本四、前一～前四と表記)、これら18の地区町村は8つのブ

ロックにふり分けられる¹。氏子の奉仕で行われる御柱祭では、担当する御柱を建立するまでに必要な労力と資力はすべて、各ブロック内で賄われる。そのため、各ブロックの氏子数ができるだけ均等になるように村は組み合わせられる。共同作業を考慮してできるだけ近接する村が一つのブロックに入れられるが、以前は氏子の数を重視して、飛び地の村が組み合わせられたこともある。それでも氏子数には偏りが生じるため、限られた数の住民しかいなかった昔には、大きな人口を抱えるブロックに、より多くの人員と資力を必要とする大きな柱の担当があてられていた²。現在は技術の進歩や人口増加もあり、氏子数は以前ほどさしせまった問題でもなくなった。地区割も (1)湖南・中州 (2)豊田・四賀 (3)ちの・宮川 (4)玉川・豊平 (5)北山・米沢・湖東 (6)泉野・原 (7)金澤・富士見 (8)本郷・境・落合 と、すべて隣接地区の組み合わせであり、氏子数が少なくても大きな御柱を担当している³ (資料2)。

資料2 上社の領域：茅野市(地区別)と隣接市・郡



茅野市 HP より引用

各ブロックが1本の御柱を無事に曳行し建てるためには地区同士が協力する必要があるのだが、必ずしも内部の関係が平等で仲が良いとは限らない。前述のように、御柱祭に参加する単位である「地区」は昔の「村」であるわけだが、「村」同士がライバル関係にあった場合もあれば、親村と新田といった支配関係にあった場合もあり、長い伝統に根ざす地区の関係は簡単に変えられるものではない。また、それぞれの地区がプライドをもち慣習もある中、御

柱祭に関連する作業のやり方も様々であり、隣村といえども相容れられるものでもない。さらに詳しく見ると、地区はいくつもの区(昔でいう「部落」)から構成されてお

¹ 本一が最も太く長い柱であり、本四にいくほど細く短い柱になる。同様に前一から前四にいくほど細く短くなる。本宮と前宮の御柱を比較すると、前一よりも本一、前二よりも本二といった具合で、本宮の御柱の方が大きい。したがって、本一の担当が御柱祭の花形となる。

² 近代以降、上社領域では、どの御柱をどのブロックが担当するかは御柱年の2月の抽籤で決定する慣わしになった。抽籤であれば、本来ならどのブロックにも平等に本一や前一という大きな柱が割り当てられるはずであるが、実際は、大きなブロックであるちの・宮川地区と玉川・豊平地区が本一を担当する回数が圧倒的に多い。また、本郷・落合・境のような小さいブロックは、小さい柱を自発的に希望し、前四等の小さな柱を担当することが多かったともいわれる。

³ 2010年の御柱祭で湖南・中洲地区が長い御柱祭の歴史ではじめて本一を担当したことで、すべてのブロックが本一担当の経験をもつことになった。労力・資力の問題に加え、御柱祭そのものが、氏子の純粋な「奉仕」から「見せる」要素が強くなるなど、性格が変化していることもその背景にあると思われる。

り、実際の作業は人々が普段生活している区が単位になっていることもあり、区同士の関係でも昔ながらの位階構造や強い慣習が残っていることがわかる。したがって、御柱祭ではブロックで共通の法被を着ることはあまりなく、地区共通のものにそれぞれの区の名前が入ったものや、地区によっては区ごとでばらばらの法被を着て参加するのである（資料3）。御柱祭は、自分の住む地区を認識し、そこへの帰属を改めて確認する場でもある。

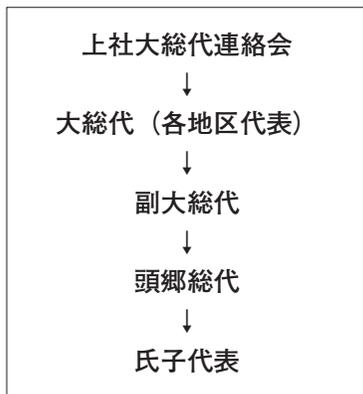
資料3 色とりどりの法被（本三：宮川・ちの地区）



御柱祭の運営組織

まず、御柱祭の運営組織を見てみよう（資料4）。祭り全体をとりまとめるのは諏訪大社氏子組織であり、その頂点には上社大総代連絡会がある。ここには、原則、地区（村）で1人ずつ選出された大総代が集まるが、8つの地区ブロック間の連携をとりながら、諏訪大社宮司も一緒になって、祭り当日の進行をはじめとした全体調整を行う。しかし各地区の慣習や決定が強い影響力をもつ御柱祭では、大総代連絡会は、個々のブロックの決定に対して強制力をもつわけではなく、あくまでも全体の調整機関でしかない。一例をあげると、平成22年には、曳き子に観光客の動員を認める案が二つのブロックから出された⁴。氏子の奉仕という側面にこだわった他のブロックの大総代たちが強い反対を表明した結果、一つのブロックは取り下げることになったが、北山・米沢・湖東ブロックは単独でこの新しい試みを決行した。

資料4 上社御柱祭運営組織



⁴ 御柱祭を観光客誘致に利用するという方針をめぐっては、その是非をめぐって大きな議論がある。曳き子に観光客を動員する案を出したブロックは、いずれも、上社領域の中では主要な観光地であり、ホテルやペンションも多く存在する。この問題に関しては、また別稿で論じることにした。

こうした全体調整の役割と並んで重要な大総代の役割は、ブロック内と自身の地区をまとめることである。各ブロックには最低でも独自の慣習をもつ二つの地区(村)、中には三つの地区が含まれるわけで、それらが協力して作業を進める上で、大総代間の連携は必須である。また各地区では副大総代と、区(部落)ごとに選出される頭郷総代や氏子代表などが選出され、大総代とともに運営の責任者として機能する。区レベルで見た場合、日常生活においては区長がコミュニティの長として全体をまとめているが、御柱祭に関連する内容における区の責任者は頭郷総代であり、区長といえども頭郷総代の指示に従わなくてはならない。しかし、後述する御柱祭の区レベルの作業と日常生活との間にははっきりとした線引きをすることは難しく、時には頭郷総代と区長の役割分担がうまくいかないこともある。しかしいいかえれば、それだけ普段の生活と7年に一度の御柱祭には、空間的にもメンバー的にも重複があるということだ。

御柱祭における共同作業とコミュニティ

実際の作業を行う現場では、曳行・建御柱が出来るように木を加工し(木作り)、諏訪大社まで曳行し、建立する過程で色々な作業があり、作業担当責任者が地区ごとに決められる。たとえば豊平区では、木の加工にかかわる「斧方」、綱を担当する「輪なぐり」「元綱」「小綱」「追いかけて綱」をはじめ、めどをコントロールする梶子衆など16役あるが、湖東地区では輪なぐり等の担当は、すべて斧方の役割に含まれるように、地区によって作業区分は異なる。人々は、作業責任者の指示に従って作業をすることになるが、年齢や経験値、体力、性別に応じ、老若男女それぞれに役割が振り分けられている。京都の祇園祭のように、作業に必要な職人を市外や全国各地から集めるのとは異なり、労力は、すべて地区内で調達することが原則である⁵。氏子の奉仕として自力で供給し続けてきた伝統が今でも残っているのである。

準備段階における大きな作業は、木作りと綱打ちである。この作業は「村」ごとに伝統的なやり方があり、地区差がはっきりと出る部分である。木作りは大工や建築業に従事する人たちによって構成される斧長・斧方を中心とした男性陣の担当である。木作りは御柱祭の心臓部にあたるようなもので、それを仕切る斧方は、昔は御柱祭の準備過程で最も力をもっていた⁶。木作りと並んで、曳行の準備に欠かせないのは綱打ちであるが、たくさんの細い綱を何重にも縊り合せていく作業には大勢の男女がかかわる。柱の前方、元の部分にある左右にのびる綱を「輪なぐり」、そこにつなぐ太い綱が「元綱」、さらに「女綱」と「男綱」と呼ばれるものが、そしてそこから「曳き綱」が

⁵ 近年では、特殊な技術を要する作業に関しては、諏訪地方内の別の地区から応援を頼むこともあるようだ。たとえば昔ながらの道具を使った建御柱ができる人は、諏訪地方でもごく少数に限られた人たちだけであり、上社と下社の境を越えて、いくつものブロックに駆り出されることもある。

⁶ 最近の御柱祭では「見せる」部分が強調されるようになってきたが、それにしたがって曳行がより重視されつつあり、斧方よりも、元綱や梶子衆の影響力が強まってきている。

つながれる。その他にも、柱を曳く際にバランスをとるために、柱の後方には引き綱とは逆の方向に引っ張る「追いかけ綱」と、めどから下される「命綱」がある。昔はワラを打って綱を作り、それを搓って太い綱を作る過程すべてが手作業で行われた。最近ではロープを使うところがほとんどであるが、今でも泉野・原村地区をはじめとし、昔ながらに山から拾ってきた藤の根を綱に巻き込んで強度を高める方法で綱搓りをするところもある。綱の材料、搓り方、使う道具、綱の結び方、どれをとってもそれぞれの「村」の伝統があるのである。しかしブロック内の統一がたとえとれていないとしても、伝統が優先されることが多い。というのも綱打ちの作業はブロック内で綱の担当を決め別々に進められるからである。たとえば北山・米沢・湖東地区の場合、どの綱を担当するかは抽籤によって決定するが、湖東地区では慣例で分けられている3つのブロックでそれぞれの伝統的なやり方に基づき作業が進められる。御柱祭への参加が「村」単位であることが、ここからもよくわかる。

曳行においてももっとも体力を必要とされるのは梃子衆で、柱に近い場所で梃子棒を使いながら曳行をコントロールする。ここには若い男性が集まっており、めどの上に乗る人たちも含む。めどのコントロールを間違えると狭い通りでは沿道の民家につけたり、御柱がバランスを崩して倒れたり、時には前に進まなくなるので責任重大である。諏訪の男性は少年期からめどに乗ることにあこがれて下積みをするといわれるが、御柱祭で多くの観衆の注目を集める梃子衆が御柱祭の一番の花形であることは間違いない。もちろん梃子衆だけでは御柱を動かすことはできず、その他に曳き子とよばれる多数の人々が必要であり、これを担当するのがその他多くのコミュニティの人々なのである。

こうした技術や慣習は共同作業を通じて年長者から年少者に引き継がれる。めどの乗り方や梃子の扱い方のこつも、また同様に伝授される。しかし、御柱祭で必要とされる技術やこつは決して伝統工芸的な「技・巧」といったものではなく、生活に必要な技術の延長であり、ちょっとした「こつ」である。選ばれた者だけしか手に入れることができない特別なものではなく、誰でも経験することで得られるという特徴をもつ。もっとも、こうした技や慣習は現代では御柱祭という行事においてのみ有効であり、普段の生活には基本的には関係がない。彼らがいうには「その時が終わると、次回まで忘れてしまい、次回やってもう一度思い出す」具合のものである。しかし重要なのは、7年に一度の御柱祭で、技術や慣習の伝達の過程があり、そこで世代を超える住民間の交流があり、共同体意識や仲間意識が生まれることである。まさにこれが、価値ある「社会関係資本」になるのだ。御柱祭参加者は口をそろえ、特段、コミュニティがまとまるために御柱祭に参加するわけではないが、「村」の慣例に従って氏子としての奉仕を行うことが、結局のところ地域コミュニティの結束につながっている、という。御柱祭のような伝統的な行事は、人々が意識することなく「社会関係資本」を蓄積できる貴重な場であることがわかる。

御柱祭には伝統的な文化的技術の継承もある⁷。木遣りは曳行や建御柱を進める際に号令や掛け声になる重要な役目を担っており、十分な技術と経験を要するものである。名人といわれる者から子どもにいたるまで層が厚く、小学生を中心に編成されたこども木遣りは、子どもにとって御柱祭デビューの場になる場合も多い⁸。地区の木遣り保存会を通して伝統を次世代に継承している。長持ちは、大きな箱に長い竿をつけて荷物を運搬していた時代を再現するものであるが、里曳きの際、華やかな雰囲気を作り出す。上諏訪や下諏訪を中心に広範囲で採用されている「道中長持ち」は、足を前に払うように歩き、衣装も凝っている。それに対し、金澤地区は「金澤長持ち」といわれる独特の流儀をもっている。足を高く上げ足裏を見せて踊り、衣装も道中長持ちとはまったく異なる。お腹に金太郎の腹巻のようなものを一枚着て、その上に上張りをはおり、短パン、長靴下という「雲助」スタイルで、昔の金澤峠越えを表現している。貴重な伝統であるにもかかわらず、金澤地区では長持ちにかかわる人口が激減し、一度はこの伝統が切れかけた。しかし平成16年に若手住民から声があがり、金澤長持ち保存会が結成され、ベテランが若手に技術を伝承する場を作った。最近では体力の要る踊り手は20-30歳代の若手、歌は高齢者という役割分担でパフォーマンスを行っている。金澤長持ち保存会の結成は、伝統の継承を復活させただけにとどまらない。金澤長持ち保存会のある会員は、若者人口が減少しコミュニティの安定度が相対的に低下していた金澤地区に、高齢者と若者の交流を通し、絆が戻ってきたと感じている。

以上では、御柱祭の作業について簡単に紹介をしてきたが、こうした準備は地区(村)または区(部落)内の普段の生活空間で、普段と変わりのない隣近所の人々との共同作業で進められ、またそうしたことを通じて既存のコミュニティを再認識し維持していることを示してきた。しかし既存のコミュニティの結束度の強さと、よそ者を排除するコミュニティの閉鎖性とは表裏一体である。実際、御柱祭では伝統的にその参加を、実質的には、古くからの住民氏子に限ってきた面も否定できない。しかしながら、近年の社会変化の中で状況は変わりつつある。次節ではこの点について見ていくことにする。

⁷ 他方で、ラッパ隊や鼓笛隊といった新しい御柱祭文化にも注目すべきである。御柱祭の伝統に反するとしていまだ正式に編成されていない地区もある。しかし平成22年には本一を担当した湖南・中洲地区の若連(若者連合)が、長老たちの結成反対の声にもかかわらず、御柱祭を盛り上げるためには必要であるとして鼓笛衆を結成したことに示されるように、現代の御柱祭では重要な役割を担いつつある。御柱祭には男性中心の活動が多い中、ここには女性も多く見られ、新しい関係性が生まれる可能性をもつ。

⁸ 小学校は今でも地区に1校ずつ存在する。小学校では運動会や学芸会といった様々な機会に、木遣りや模擬曳行、おんべを振る応援など、しばしば御柱祭の要素を取り入れる。子どもたちは学校生活を通して御柱祭に触れていくことになる。また、小学校のPTAは御柱祭時の地区エージェンツとして重要な役割をもっている。

3. 御柱祭における新しい動きとコミュニティの変化

近年、諏訪地方では産業構造の変化や地域産業の停滞、人口の移動など様々な社会変化が見られる。農業従事者や自営業者が減り、その代わりに増加したのは工場や会社へ通勤する者たちである。地域経済は停滞しており、商店数や商業従事者数、製造業従事者数は平成の一ケタ時代をピークに漸減している。主産業の一つである観光業も滞り、この10年間で観光客は約3分の2になっている。人口もここ10年は減少傾向にある。とりわけ働き盛りの人口比が全国平均よりも低いことが示すように、若者の流出が顕著で、高齢化も進んでいる。とはいえ、新たに入ってくる者も少なくなく、新住民をどうコミュニティに融合させるかも課題になっている。

こうした社会変化は、御柱祭催行の上でも問題を引き起こしている。既存の住民の流出は氏子数の減少を意味し、労力や資金の減少につながる。とりわけ地元を離れて仕事に就く若者が増えることで、梶子衆といったフィジカルな力を最も必要とするセクションを担う者が集まらず、曳行そのものが立ちいかなくなる可能性も出てきているのである。一方で新参加者が累積的に増えることは人口減少を食い止める要素とはいえ、御柱祭に無関心で参加しない住民が数の上でも割合の上でも増えることにもなり、必ずしも御柱祭や伝統的な地域コミュニティの維持にとって好ましいことではない。しかし、このような近年の社会変化に、比較的柔軟に御柱祭は対応しているように思われる。本章ではまず、新参加者の流入と、若者や既存住民の流出という、人口移動の引き起こしている二つの問題への対応を、事例をあげながら見ていくことにする。

伝統的なコミュニティの緩やかな受容的開放

増え続ける新参加者に対し、その者たちを組み込んだ新しい関係性を形成したのは中大塩団地である。中大塩は豊平地区の西端で、豊平・米沢・湖東地区に囲まれた一角に立地する。ここは長野県住宅供給公社が開発した一軒家を中心とするニュータウンであり、県内だけでなく、全国から人が集まっている。1,100世帯、3,000人が居住するこの地区は、豊平地区から独立して中大塩地区という新しい行政区となったが、御柱祭では引き続き豊平地区に含まれており、豊平区の全住民の3分の1を占めている（資料5）。一般に、諏訪地方の新参加者は区民（「部落」のメンバー）として登録し区費を払っても、コミュニティの中ではよそ者として扱われることがしばしばであり、日常生活において出払い等の共同作業もせず、御柱祭の参加にも無関心なことが多い。これは、既存の住民側の対応である場合もあれば、新参加者側の選択である場合も少なくない。しかし、中大塩団地の事例では、中大塩区として地域行事に関与し、御柱祭にも氏子として参加することを住民間で決定をし、豊平地区もそれを了承したのである。

平成22年度の御柱祭では、豊平地区の氏子世帯から徴収した資金1,100万円に対し、中大塩区だけで徴収額は460万円に達した。資金の分担だけでなく労働奉仕も行

資料5 茅野市の人口（平成25年）

茅野市人口および世帯数—毎月人口異動調査に基づく推計結果						企画総務部企画課統計調査係											
平成22年国勢調査に基づく推計結果						行政区別人口及び世帯数については、茅野市の独自集計である。平成25年4月1日現在											
地区	区・自治会		世帯数	人口	地区	区・自治会		世帯数	人口	地区	区・自治会		世帯数	人口			
	ちの	上原		1,299		3,021	壺	南大塩			645	1,402	金沢	大沢		193	345
嶺内			537	1,381	下菅沢			78	189	青柳		63		149			
茅野町			250	617	福沢			360	737	御狩野		108		300			
仲町			441	1,039	下古口			196	487	会沢上		102		301			
塚原			824	1,977	上古田			97	289	会沢下		183		674			
本町			960	2,164	御作田			35	100	大池		56		162			
城山			240	625	塩之日			292	751	木舟		109		329			
					上場沢			95	299	会沢台		37		81			
計			4,541	10,824	広見			197	407	新金沢		74		171			
宮		高部		118	277	平		奥蓼科		35	66	湖		旭ヶ丘		43	138
	新井		126	322	山寺団地			41	129	サン・コーポラス旭ヶ丘			46	146			
	安国寺		322	802	グリーンヒルズ			81	193	計			1,014	2,796			
	中河原		323	728	計			2,152	5,049	上菅沢			147	378			
	茅野		795	1,957	玉		山田		163	487	東		中村		224	743	
	西茅野		257	702			中沢		178	492			山口		62	169	
	坂室		159	484			口道		81	249			松原		19	34	
	両久保		684	1,824			栗沢		291	831			花崎		75	207	
	田沢		117	359			神之原		1,270	3,522			堀		122	354	
	丸山		152	440			北久保		72	183			新井		112	337	
ひぼりヶ丘		222	583	上北久保			85	263	会山			38	108				
みどりヶ丘		153	315	子之神			166	492	須栗平			83	231				
西山		139	375	菊沢			213	626	笹原			103	275				
墨筋内		27	46	穴山			187	524	白井出			47	113				
川	向ヶ丘		143	330	川	農場		28	66	北	白井平		34	87			
	長峰		397	1,004		小泉		441	1,057		計		1,066	3,036			
	雇用促進住宅		24	32		南小泉		160	464		柏原		160	371			
	東向ヶ丘		236	598		小堂見		642	1,782		湯川		218	624			
	赤田		17	25		緑		168	408		芹ヶ沢		303	766			
	堤久保		16	32		美濃戸		28	50		糸峯		106	295			
	計		4,427	11,235		計		4,173	11,496		鉄山		4	5			
	米沢	埴原田		272		615	泉	大日影			49	143	山	白樺湖		104	185
		鋳物師屋		88		210		下槻木			125	378		蓼科		411	723
		北大塩		445		1,263		上槻木			102	324		緑の村		35	63
塩沢			144	428	小屋場			66	183	車山		133		221			
米沢台			151	422	中道			212	641	蓼科中央高原		176		309			
計		1,100	2,938	計		726	2,031	計		1,650	3,562						
中人塩	中大塩1区		314	828	野	南蓼科台		87	147	茅野市総計	中沖		10	30			
	中大塩2区		221	572		若葉台		85	215		計		10	30			
	中大塩3区		306	765		計		726	2,031		茅野市総計		21,952	55,775			
	中大塩4区		252	613		茅野市総面積		265.88	人口密度								
計		1,093	2,778														

茅野市 HP より引用

ったが、彼らには御柱祭の慣習や技術の伝統がなかったため、何度も近隣区の見学をしてその習得を試みた。その結果、中大塩区は御柱祭において存在感を示すことに成功した。中大塩区の責任者の1人は、このように御柱祭に積極的にかかわり、豊平地区の中で不可欠な地位を築けたのは誇りであると考えており、さらに、祭りへの参加を通し普段の生活においても地域コミュニティとのつながりが出てきたことに意義があると強調している。中大塩区の存在感は、元から住んでいた周辺の人々たちも認めている。米沢地区で生まれ育った70代の男性は、御柱祭におけるコミュニケーションはむろんだが、日々の生活における中大塩区の住人との新しいつながりがより喜ばしいといっている。従来、分離しがちであった既存住民と新参加者が、御柱祭準備の共同作業をきっかけにまとまりを見せた一例である。

新参加者を組み込んだもう一つの事例は、通称ペンション村といわれている諏訪郡原村の一つの区である。原村は農業地区で、諏訪地方で人口が近年増加している数少ない地区の一つであるが、県の内外からペンションの経営や定住目的で引っ越してきた新参加者が集まるこの一角は人口増加にも貢献をしている。ペンション村には、平成25年には95世帯217人が居住している。原村全体(3,000世帯で7,800人)から見ると世帯数では全体の7%程度ではあるが、小さめの区(部落)一つ分としては十分な人口を抱える。戦後、7,000人に達した原村の人口は、その後、徐々に減少の途をたどり、昭和40年代には6,000人を割ってしまう。危機感を覚えた原村は、積極的に観光の振興や移住者の誘致を試み、その結果、着実に人口を増やすことに成功した。こうした動きの中で、ペンション村の住民と既存住民の間のつながりが少しずつ形成され、平成22年の御柱祭にはペンション区としての参加が実現したのである。ペンション村の住民は、御柱祭への参加を通し、既存住民が今まで以上にここの住民を受け入れてくれたという感触があると話す。最近では、原村の農業のブランド化を通して農業振興に励む動きの中で、そうした野菜を使い、PRしてくれるペンションとの原村内でのつながりはますます高まっている。

中大塩区や原村の事例はかなり大きな規模で、新参加者を既存のコミュニティへ組み込むことに成功した例である。しかし、そこまでの規模はないが、Iターン族や別荘定住者などの新規住民を取り込む試みはいくつもの場所で見られる。豊平地区で売り出されたある新興住宅地では「ここの住民は御柱祭にも参加し、地元住民とコミュニケーションがある」ことを強調し、新規住民の誘致を図っている。また、多数の別荘が集積する山間部には、近年、移住して定住する者が増えている。以前はそのような人々と既存の住民の間には、ほとんど生活レベルでの行き来はなかったが、最近はこのでも変化が見られる。湖東地区の須栗平区で長いこと村や御柱祭を中心に担ってきた男性は、平成22年の御柱祭では、大祭の時も小宮祭の時も、地区内の別荘定住者に招待状を送って働きかけたと話す。もっとも、その呼びかけに応えた者はあまりいなかったようだが、従来の閉鎖的な「ムラ」を、御柱祭という機会を利用して開放しようとする

るコミュニティ内部からの動きは重要である。

以上では、排他性が強くよそ者を受け入れない傾向にあった伝統的なコミュニティの緩やかな受容的開放の例が示された。既存のコミュニティ内部の関係性は残しつつも、そこに新参者を取りこんだのである。

既存の住民の中から生まれた新たな関係性

新参者への対応が必要とされつつある一方で、既存住民、とりわけ若者の流出もまた、御柱祭催行にとって、早急に対応しなければならない課題である。これに対応した事例として本稿の最後にあげるのは三友会である。三友会は、前述のように新規住民を既存のコミュニティ・ネットワークに取り込むのではなく、今までにない関係性を作ったこともあり、地元でも大きな議論をまきおこしている。

三友会は、単独の「村」を超え、北山・米沢・湖東ブロックの若者を結集した団体である。近年に見られる若者の御柱祭離れを不安視し、時勢に合った新しいやり方を提起し実践することでできるだけ多くの若者を参加させ、これら三つの地区の若者の結束力を高め、より良い曳行と建御柱を行うことを目的に組織された。若者の御柱祭離れにはいくつもの要因が考えられる。最大の理由は地元で就職をせず、諏訪地方の外に出て行く若者が増えていることである。また、地元で働く者であっても、自営業ではなく会社勤務者が増加しており、御柱祭に関心はあっても時間を自由に使うことができず、積極的に参加できる若者が減少したことも大きい。いずれにせよ、祭りに若者をひきこめなければ力仕事が必要とされる作業が滞り、御柱祭全体に影響を与えることになり大問題である。

三友会の設立背景には、こうした若者の祭り離れに加え、このブロック独特の問題がある。北山・米沢・湖東の三つの地区同士の仲の悪さである。これらの地区はいずれも元は新田であり、南大塩が豊平地区で絶対的な親村として地区内を強力に仕切っていたのとは異なり、ブロック内には慣習的に圧倒的な力というものが存在しない。また、通常は二つの地区で一つのブロックを作るのに対し、このブロックは例外的に三つの「村」が組み合わせられていることも、仲の悪さを助長することになった。前節で述べたように、御柱祭の花形で男性なら誰もがあこがれるのは正面のめどに乗ることであるが、正面のめどは一つの柱につき2本しかない（資料1）。通常の二地区構成のブロックでは、争い回避のため、地区ごとに1本ずつ担当するめどを分配するが、北山・米沢・湖東では2本のめどを三地区で熾烈に争わなければいけないわけだ。過去には、めどの分担に納得がいけない梃子衆が本番の曳行中に足をひっぱり御柱の曳行を止めてしまったこともあったし、ブロック内の大げんかもしばしばであった。

こうした状況の中、三友会は三地区横断的な組織を組織し、既存住民であるか新規住民であるかの区別なく、多くの若者を集めることに成功した。活動が始まった頃は会員もわずかであったが、平成16年には200人、そして現在の会員数は約440人と急

増しており、これは同ブロックの若者居住者1,000人のうち4割強にあたる。地理的範囲・構成員ともに従来の「村」の境界線を越えた新しい組織となった三友会は、会員のアイデンティティを高めるために様々な工夫をこらしている。まず、三友会独自の法被を作り、三友会としての活動の場では必ず着用することを義務づけた。これはすなわち、御柱祭において長年の伝統であった「村」や「部落」ごとの法被着用を禁止したことを意味する。さらに、平成16年の御柱祭までは三友会会員は全員共通の法被を着た上で、背中には「村」の名前を入れていたが、「村」名があると縄張り意識が生まれがちであるとの認識から、平成22年には村の名前を取り除き、三友会という文字に統一した法被を着ることになった。こうした方針は、伝統的コミュニティを維持する脈絡では非難されることではあるが、白地にピンクの桜を散らし、背中には明るい緑で「三友会」という文字を入れた斬新なデザインの法被と、ベアの緑のズボンをはいた大勢の若者が一堂に集まるとインパクトは強く、会員の中では帰属意識は否が応でも強まり、外部の人々からの認識度も高まることは間違いない（資料6）。第二に、三友会の活動により積極的にかかわる者が、より良いポジションを御柱祭で与えられるという原則を作った。すなわち、従来は地区やブロックの中で権力をもつ者がめどの高い位置を独占してきたのだが、

資料6 三友会



三友会ではそういう慣習を取り払い、三友会の様々な活動や練習に参加することで自分の望みをかなえることが可能になった。「選ばれた」人間がやるのではなく、「やりたい」人間が出てきてやることをモットーとし、若者のやる気を引き出した。三友会の会員になることで、地区コミュニティの中では手に入れにくいポジションを得られるとあれば、三友会への帰属意識も高まるものである。

平成22年の御柱祭では、三友会が仕切った御柱曳行は成功をおさめた。北山・米沢・湖東ブロックで600人ほどの曳き子がいたが、そのうち350人が三友会の会員であり、本祭に大勢の若者を動員するという目的を十分果たした。しかし既存のコミュニティの枠を越えた新しい関係性を含むこの組織には、問題点もある。たとえば、三友会は諏訪大社を頂点とする氏子組織からまったくはずれた存在で、御柱祭全体の公的・慣習的な運営組織におさまらない。平成22年度は北山地区の大総代の強力な支持で力を発揮できたが、そういった支援者がいなくなった場合、十分に機能できなくな

り、三友会のネットワークは弱まるかもしれない。御柱祭を行う上で、とくに曳行や建御柱においてフィジカルな力をもつ若者が主要な役割を担うことは確かであるが、しかし、それだけでうまくいくものでもない。三友会と親和的とはいええない地区の運営責任者や氏子組織もあり、それらとどのように向かい合っていくかがカギになる。しかし、それ以上に問題なのは、三友会の存在が、今なお残る生活の基礎構造たる伝統的コミュニティにおける人間関係や慣習を壊す可能性もあることだ。長い間に蓄積された価値ある「社会関係資本」が崩れるという大きな損失の危険がある。実際、この理由によって、昔からこの地に住み続ける人々の間では、三友会に対してはかなり懐疑的で批判も強い。

しかし他方で、三友会は地域コミュニティの新たな創造につながる可能性ももちあわせる。三友会は、地元の祭りである茅野どんばんやクリスマス・デコレーション、街の清掃活動、鼓笛隊演奏など、御柱祭以外の地域活動も率先して行い、北山・米沢・湖東以外の地域とも新しいつながりを形成しつつある。三友会会長は「何かの活動をやって会員同士の顔を合わせる機会が増えると、結束力が強まる。新しい地域ネットワークを作ることが目的ではないが、やっていれば自然にそういったネットワークや助け合いというものができて、それは地域にとって好都合であろう」。あくまでも三友会は「御柱祭を維持し、発展させるための組織である」といいつつも、三友会会長が地域コミュニティの創造や再生を意識していることは伝わってくる。このような三友会の事例は、新規住民を含む地域の中に新しい関係性をもちこんでだけでなく、伝統的な祭事に、現代的な目的縁的コミュニティの要素が見られるようになったことも示唆する。もし、三友会が作る新しい関係が、既存の地域コミュニティと共存できるのなら、それは地域の活性化に大いに貢献することになるだろう。

おわりに

以上では、日常生活レベルの伝統的コミュニティが比較的機能している諏訪地方を例にとって、どのようにコミュニティを維持してきたのかを考えてきた。ヒアリング調査で皆が一様に強調したのは「フェイス・ツー・フェイス」の関係と共同作業をすることこそが、コミュニティ内のつながりを形成するという点であった。昔の社会なら当たり前であったこうした関係性は現代社会では希薄なものになりつつあるが、そのような時勢に大勢の住民が伝統にもとづき共同作業をする御柱祭は貴重な存在である。

御柱祭の準備は昔ながらの村の単位で進められ、隣近所の人々が集まって共同作業を行う。日常生活の延長線上にあるといえる御柱祭は、既存の地域コミュニティの在り方を確認し、維持する場であるのだ。他方、古くからの伝統を今に継承する御柱祭

は、決して社会の変化を無視してきたわけではなく、それらを取りこみながら、コミュニティの発展や創造に向けて機能するものでもあった。長い伝統に支えられている行事は、慣習にこだわり新規住民を排除する側面をもち、それが強く現れるとコミュニティそのものを壊してしまう危険性はある。しかし近年の諏訪地方の場合、様々な社会変化に御柱祭をうまく対応させ、新規住民をも組み込んだネットワークを作りつつあるように思われる。